

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 支援-30

学校名・団体名	長岡市立脇野町小学校
HPアドレス	http://www.kome100.ne.jp/wakinomachi-es/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	「ともに生きる」 ～陸前高田市交流活動を通して～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>陸前高田市への訪問・交流に向けての活動を中核として、復興に取り組む人々の姿や思いにふれるとともに、自分たちにできることや自分の生き方についての考えをもつ。</p>	

○ 活動の内容

<4~9月>

① 自分にできることを考える

昨年度の6年生から「支援活動を続けてほしい」というメッセージを受け、学年会議を経て支援活動を継続することに決定した。子どもは「被災地の人々に笑顔になってもらいたい」という思いから、長岡花火の打ち上げ・陸前高田市立広田小学校との交流会・広田町民との交流会などを企画したり、「自分たちの力で何かできることはないか」という思いから、仮設住宅周辺の草取り作業やチャリティーグッズの販売による義援金集めなどを企画したりした。自分たちのやりたい活動を実現するための具体的な計画や問題点を考え解決したり、被災地の現状を多くの人々に知ってもらうために広報活動を行ったりと、問題を発見・解決する姿や自分たちの思いを自分たちで考えた方法で表現する姿が見られた。

② 人とのつながりを深める

花火の打ち上げに向けた募金活動や、義援金を集めるためのチャリティーグッズの販売活動は、子どもだけの力で行うことは困難である。花火師への依頼や、各種のイベントに参加させてもらうために主催者に交渉したり、地域の施設に募金箱を置かせてもらえるようお願いをしたりする中で、子どもの社会性やコミュニケーションの力の向上が見られた。

また、本活動を知り、地域の音楽愛好家からチャリティーライブを開催したいとの申し出があったり、イベント主催者から参加の誘いを受けたり、ラジオ局から取材の申し入れがあったりしたことで、子どもは自分たちの活動が多くの人々に支えられ、支援の輪が広がっていることを実感した。そのような経験から、子どもの中に「長岡の人々の気持ちを被災地に届けたい」という新たな気持ちが生まれ、ビデオメッセージを集める取材活動が始まった。

県内FMラジオ局からの取材



③ 活動を見直し修正する

募金・販売活動は、計10回行った。繰り返し活動する経験を重ね、子どもは自分たちの活動を見直し、修正することができるようになってきた。交渉の電話のかけ方や伝える内容、募金活動での並び方や呼びかけの仕方、チャリティーグッズの商品の品質など、活動のたびに振り返りを行い、子ども同士で意見を出し合いながら活動を修正していくことができた。



地域の祭りでの募金・販売活動



長岡市内のイベントでの募金活動

陸前高田市広田町での交流会



<10月~2月>

④ 満足感・達成感を得る

10月6~8日の2泊3日で、陸前高田市訪問活動を行った。これまで準備してきたことを実行し、被災地の人々と実際にかかわることで、子どもは多くのことを感じる事ができた。

花火の打ち上げや義援金贈呈、交流活動では、「ありがとう」

「本当に嬉しい」という言葉をいただき、子どもは大きな満足感を得ることができた。仮設住宅の草取り作業を行った子どもは、仮設住宅の自治会長さんから「住む人が減ってきて手が回らなかった」という言葉を聞き、「やってよかった」「自分が考えたことで喜んでもらえて気持ちよかった」と達成感を感じていた。

また、自分たちが花火募金で集めた金額よりも大きく上回る数の花火を打ち上げてもらったことから、花火師の方への感謝の気持ちと、たくさんの人々の被災地を支援する気持ちを改めて感じる事ができた。



仮設住宅周辺の草取り作業



仮設住宅自治会長さんへ義援金贈呈



陸前高田の空に咲いた花火

⑤ 社会の問題と向き合う

被災地の現状を見て、現地の人と話し、自分の肌で感じてきたことで、子どもの意識の中に新たな課題が生まれた。「防潮堤や盛り土はできているけれど、あまり家が建っていない」「道路を走っている車は工事車両が多い」など、瓦礫は片付けられて復興は進んでいるけれど、人々の生活はまだまだ元通りにはなっていないこと。「仮設住宅から引っ越すことはいいことだが、地域から人が減っている」「外を出歩いている人が少なく、人とのかかわりが減ってきている」など、被災地には新たな課題が生まれていること。これらのことから、子どもは「どうなったら復興したと言えるのか?」「本当の復興とは何か?」「地域コミュニティを再建するには?」という現実社会の問題に目を向けるようになった。

⑥ 自分の思いを表現する

訪問活動を通して生まれた課題から、子どもは新たなグループに分かれて活動を始めた。「自分たちの活動に協力してくれた人々への感謝の気持ちを伝えたい」「被災地の現在の様子を伝え、さらに支援を呼びかけたい」「自分たちの学びや成長を被災地の人々に伝えたい」と考える『伝える』グループ。「これからも陸前高田市への支援を継続したい」「他の災害で被害を受けた地域も支援したい」「震災遺構などを未来に残したい」と考える『支援活動』グループ。一人一人が課題意識をもって所属するグループを決め、ポスター・回覧板・プロモーションビデオ・チラシなどを作成したり、校内での座談会や市役所での広報活動を企画したりと、自分の思いを自由に表現する姿が見られた。

○ 成果

- ・長岡市や陸前高田市の人々の協力を得て活動を進めていくことで、社会参画力や人間関係形成力の伸長を図ることができた。
- ・被災地の人々を意識して活動を重ねたり、自分たちの活動を振り返ったりすることで相手意識や目的意識、客観的に自分を振り返る力などが向上した。
- ・被災地の現状を学び、復興に向けて活動する人々とその思いを知り、自分にできることを考えて進んで行動する主体性や行動力が育まれた。
- ・被害の様子を学ぶことを通して命の大切さを感じるとともに、被災地の人々の「災害への備えをしておくべきだ」という言葉から、防災意識の高まりが見られた。
- ・復興に取り組む人々やそれを支える人々とのかかわりを重ね、自分たちにできることを考えたり、今後の自分の生き方について考えたりすることができた。